ニューヨークプログラム　報告書

8 月 12 日の朝に小松空港を出発し、台北に移動して、8 月 12 日の深夜にニューヨークに到着した。到着 3 日目から 5 日目にかけて、その週末に行われる英語での OSCE に備え、マンハッタン南部に位置するペース大学で医療英語の授業を受講した。精神科医で長年医学生への教育に取り組んできたトニー・エリケッティ教授が講師を勤められた。私たちは医師役、観察者役、患者役をお互いに演じ、授業では、医学に関連する英語のボキャブラリーや単語、フレーズを教わった。よく聞く痛み表現や喫煙の言い回しなど、住んでいるだけでは知り得なかった表現を知り勉強した。また、授業の中で、OSCE という世界標準の教育でもなお、アメリカと日本では文化が違うということを知り、とても興味深かった。アメリカでは、医師と患者は一直線に座り、向かい合ってアイコンタクトをとる。日本の医学部では、医師が直接目を合わせると患者を不快にさせるので、そのように患者に向き合わないようにしなければならない、医師が机に体を向けて、顔だけを患者の方に向け、患者は顔も体も医師の方に向けるような体勢をとるようにと習ったので、アメリカのようなアイコンタクトを重んじる文化と、奥ゆかしさを重視する日本の違いがあるのだろうと思われる。

１日目、２日目の英語の授業の後、私たちはブロードウェイ女優の由水南さんと会い、２日間ゼミを受けた。南さんは金沢出身で、私が通っていた泉ヶ丘高校出身だったのでとても親近感が沸いた。勇気をもって一歩を踏み出すこと、自分の心の声に耳を傾けること。彼女が「ブロードウェイの舞台に立ちたい」という夢を描いて、本当に夢の通りに成し遂げたのは、並大抵のことではない。いくつか南さんの大事にしている言葉を教えていただいた。「step out of your comfort zone」「sky is the limit」「celebrate your every victory」の３つだ。そのうち、私が実践したいと思ったのは「step out of your comfort zone」だ。日本語に訳すと、「自分の落ち着く範囲から抜け出す」という意味になる。すなわち、自分がこれでいいや、私ってこんなもんか、と思っているところから一歩踏み出し、少しずつ前自分自身が望む方向に進もう、ということである。人間の行動は、その人自身の思考に支配される。「こんなものか」と思っていたら、体は絶対に動こうとしない。変わろうとしない。それを、「ステップアウトしよう」と思うことで、行動が変わることを彼女の経験から学んだ。１日目の終わりに、「明日の講座までに最低一人、ニューヨーカーに話しかけて会話をするように」との宿題が出たので、その課題に取り組むこととなった。初めは見知らぬ人に話しかけることに緊張したが、一度課題をクリアすると、全く苦痛を感じなくなり、２週間のニューヨーク滞在中に何人もの見知らぬ人に話しかけ、会話をし、そのうちの一人とはインスタグラムという SNS アプリで友達になるまでに会話が弾んだ。南さんと会って話して前向きな刺激を受けることができたのはとても良かった。

６日目にはフェルプス病院で ACLS のトレーニングを英語で受講した。小さいシミュレーションの部屋で行ったが、人形がとても先進的で、モニターも分刻みで波形やバイタルを調整でき、とても画期的だった。日本では ACLS を受けたことはあったものの、英語で ACLS を受けるのはやはり医学用語が英語であることもある難易度は高かった。だがとても大き

な学びを得ることができた。

７日目から９日目まではペース大学で模擬患者を交えてシミュレーション訓練を受けた。最初の２日間は医療面接、最終部位は身体診察を行なった。日本の医学教育制度と異なり、アメリカの教育の中では模擬患者を雇って医学生が医療面接の練習を行うようで、それと同じものを今回行った。現地のニューヨーク在住の模擬患者と英語で話をして、英語で主訴やその始まり、痛みの程度などの詳細を聞き、こちらが英語で説明をする。医療面接自体もかなり頭を捻り、頭を使いながらの中だったが、それを英語で行うとなるとさらに難しく感じた。面接を終えると毎回模擬患者からフィードバックを得ることができ、それを聞くことはとても勉強になった。日本の医学教育にはそういうフィードバックを受ける機会がないので、もしかしたら日本の医師は本物の患者と対峙して、その患者から意見を受けて向上していくのかもしれないが、アメリカでは本物の患者と会う前に、そのようなスキルを身につけるのがかなり特徴的だと感じた。

１０日目から１２日目にかけてはニューヨーク在住の日本人医師のクリニック・オフィスにお邪魔して見学をした。日本との違いが目で見て学ぶことができた。例えば、遠隔診療を取り入れていることや、処方箋は紙ではなく患者のメールに電子化されて届き、患者はどこの薬局でも薬を購入できること、加入している保険が一人一人違うため治療法や薬も保険によって変わること、移民が多いアメリカならでは、翻訳サービスが充実していること、などである。また、私が訪れたクリニックは所得の少ない層の患者が多く来院しており、中南米からの移民が多かった。移民の人の中には英語よりもスペイン語の方が馴染みがあるので、スペイン語でも患者と意思疎通を図っていたのが印象的だった。

その後は、マウントサイナイ大学医学部の研究室で神経行動科学の研究をしている森下先生、厚生労働省の職員として国連で働く喜多先生にお会いして現地での暮らしや研究者・外交官として働くことについてお聞きすることができた。

ニューヨークでの２週間は金沢では得られない経験となった。実際にこの目で見て、触れて、聞いたこと全ては今後の進路を考えるにおいてかけがえのない宝物となった。今回いろんな方々と繋がることができて、将来どのように関わることになるかはわからないが、視野がとても広がり、今回の経験をもとに診療に活かしていきたいと思う。